

女性研究者を活かす

日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」の取り組み②

マルチキャリアパスの理念と期待

日本女子大学理学部教授・プロジェクトリーダー 小舘 香椎子

本プロジェクトの名称である「マルチキャリアパス」には「女性には多様で柔軟なキャリアパスが提示されるべきである」という理念と期待が込められている。

結婚・出産や種々の社会通年など、女性研究者の歩む道には様々な課題があるが、それらを受け入れつつ柔軟にキャリアを選択するという道も選択肢の一つとして必要である。研究者としての資質・能力がどのような過程で獲得されたかという途中の道筋には関係なく、また、その研究活動自体にももともと多様性があったよと考えている。前回は、「女性研究者マルチキャリアパス支援モデル」の概要について記したが、今回は、その三本柱の一つのユビキタスリサーチ支援部門の活動について述べる。

ユビキタスリサーチ支援部門

ユビキタスリサーチとは、「いつでもどこにいても研究を継続する」という新しい概念である。支援を受ける育児中の研究者を「Uリサーチャー」とよび、支援要員としての「研究助手」の配置、テレビ会議システム等

のユビキタスなシステム環境の整備、病児保育環境の整備など、きめ細やかな支援を行っている。また、支援要員である「研究助手」にとってもキャリアパス形成の一助となることを目指している。

「ユビキタスなシステム環境の整備」

本プロジェクトの大きな特徴の一つは、インターネットなどのシステム環境整備によって、ユビキタスに研究を継続するための支援を行うというものである。平成十八年度は三名のUリサーチャーに対して支援を行ったが、平成十九年度は新たに二名のUリサーチャーの自宅と大学をつなぎ、これで計五名のUリサーチャーコアメンバーに対する環境の整備が完了した。さらに、平成十九年度は六カ所までの同時中継が可能な多地点接続ソフトを導入した。これにより、実験室・研究室・自宅の複数地点を同時につなぎ遠隔指示を行うことができるようになった。テレビ会議システムには、主に六つの利用状況があげられる。

(1) 研究助手との打ち合わせ・自宅から研究助手と打ち合わせをするときにメールや電

話では伝わりにくいことが、迅速かつ円滑に伝えられる。また平成十九年度から多地点接続ソフトの導入により、研究室・実験室・自宅の三カ所での議論が可能となり有効性が増した。

(2) 実験装置の遠隔操作・試行例として、平成十八年度に電子顕微鏡にデジタルデータの取得・伝送システムを整備した。自宅から顕微鏡の前の研究助手に指示を出し、その場でデータ転送をしてもらう遠隔利用が可能となった。平成十九年度から天体望遠鏡にも遠隔操作の試作システムが搭載され、夜間観測に使用されている。

(3) ゼミ・授業への参加・研究を中断することになる一つの要因は、遠隔地への配偶者の転勤である。出産予定や子育て中の女性にとって、別居生活は大きな負担となるので、研究を中断してしまうことが多い。そこで、再就職を目指すため、Uリサーチャーとして支援を受け、このシステムを活用して遠隔地から大学のゼミや授業に参画することが可能となった結果、これが大きな支えとなり、研究能力の維持にもつながり有効であった。

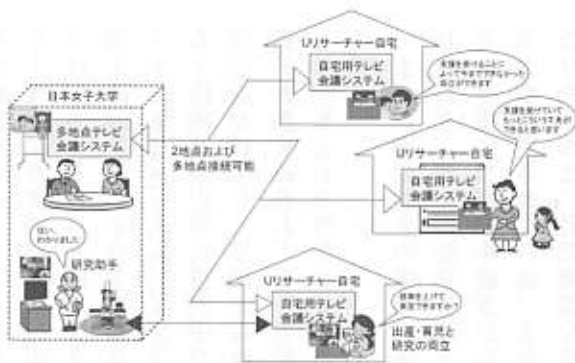


図1 テレビ会議システム

【U-リサーチャーと研究助手の活動】
平成十八年度、十九年度は、計九名のU-リサーチャーへの支援を行った。そのうち、平成十八年度中に支援を打ち切ったものは二件ある。彼らは日本に留学中の夫妻であり、当初平成二十一年度まで在日の予

(4) 図書館へのアクセス・大学と同一のネットワーク環境が実現されたので、自宅から大学図書館へアクセスし、論文を取得するなどの作業が可能になった。

(5) 緊急時の利用・中断することなく継続している研究者にとっても、子供の急な発熱などによる緊急時に、テレビ会議システムを用いた指示などに柔軟に切り替えることができ、有効であったとの結果を得ている。

(6) U-リサーチャー同士の連携の強化・多地点接続されたテレビ会議システムを用い、新たな交流を深める機会が得られた。また、複数のU-リサーチャーが自宅から同時にゼミに参加するなどの使い方も可能となった。

定であったが、本国の緊急の事情により平成十八年度末に夫が帰国の途についた。妻は引き続き留学中であるが、子どもが自国に戻ったため「子育て中」という条件からはずれることになり、支援を中断した。また、平成十九年度中にさらに二件に対する支援が終了した。子どもが大きくなり支援の必要性が低くなった等の判断による。なお、平成十九年度は新たに一名、平成二十年四月より新たに二名のU-リサーチャーを採用する予定であり、平成二十年度は計七名のU-リサーチャーへ支援を行うこととなる。

【ユビキタスリサーチャー支援による成果】

研究活動は順調であり、以下のように徐々にプロジェクトの成果が表れてきている。

(1) 研究業績に表れた成果

① 支援を受ける前よりも研究業績が増えた

・ 支援前に比べて論文数・学会発表数ともに倍以上に増えた。

・ ここ数年の仕事に関する主論文を投稿・受理させることができた。

・ 研究中断からの復帰を果たし、論文を書くことができた。

② 出産直後でも研究活動を低下させることなく継続できた

・ 研究活動を低下させずに済んだだけでなく、新聞記事掲載や招待講演などこれまでに以上の成果をあげることができた。

・ 第一子出産後は研究を中断せざるを得なかったが、今回の支援を受けて、第二子出産後には順調に研究を継続することができた。

(2) U-リサーチャー希望者の増加
平成十九年度には一名U-リサーチャーが増え、平成二十年にはさらに二名増える予定である。これは本プロジェクトの活動による波及効果の一つである。U-リサーチャーの増加には、以下の二つの要因がある。

③ 新しい研究活動を展開した

・ 教育現場にいる者として、教育にも役立つ新たな研究活動が展開できた。

(2) U-リサーチャー希望者の増加

① 臆せず妊娠・出産に踏み切る女性研究者が増えた

本プロジェクトの発足に後押しされて妊娠出産に踏み切ったという意見があった。特に、ポストドクなどの任期付きポストの方々の中で抵抗感がなくなったように思える。

② 研究中断者が復帰を希望した

研究が中断されたことでキャリア形成をあきらめていたような方が、このプロジェクトの活動を知り、復帰したいと希望するケースが相次いでいる。

(3) キャリアパス形成

U-リサーチャーのうち、専任教員については、助手から助教へ一名、准教授から教授へ一名昇格した。その他のU-リサーチャーのうち、二名は平成二十年末までに博士学位取得を目指している。

研究助手のうち四名(大学院生)は、キャリアを生かし企業・研究機関などへ就職をした。また、一名は研究者の道を志して、大学院修士課程へ入学した。

【ロールモデルの提示】

U-リサーチャーや研究助手は、皆それぞれ

れに特徴的なキャリアを有しており、「様々なキャリアパスモデルを提示する」という本プロジェクトの目的にかなうものでもある。例えば、コアメンバーである五名のU-1リサーチャーは以下の四つのモデルに当てはまる。研究助手の報告書の中でも、子育てと研究の両立に関して学ぶところがあるとの書き込みが多くみられ、U-1リサーチャーがロールモデルとして機能していることがうかがえる。

また、研究助手の中には学位取得者も含まれており、種々の勤務形態を経ながら次のポストを探するなど、中継ぎとして研究助手のポストが活用されている。また、特殊な技能を学びたいなどの目的意識をもって研究助手を行っている者もいる。このように、U-1リサーチャーだけでなく研究助手も、女性研究者のロールモデルとして意味のある存在となっている。

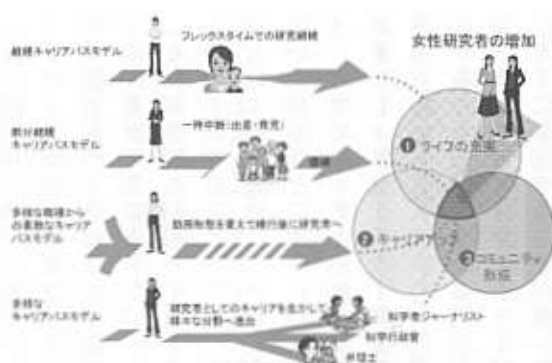


図2 女性研究者の4つのキャリアパスモデル

(1) 継続型キャリアパスモデル
 中断したくない人には、継続できるような支援する。専任職についている女性研究者であつても、子育て

中に研究の活性が落ちてしまうことは、自分のキャリア形成の上で大きな問題である。そこで、産休・育休中はもとより、子どもが小学生の間まで、研究のアクティビティを低下させないような支援を行っている。

T・K氏(家政学部 食物学科 助教)
 子どもの年齢・〇歳、三歳
 研究内容・たんばく質エネルギー栄養障害における腸管免疫機能の解析

「産休前から支援を受けたため研究助手の方に研究を引き継ぐことができ、立ち上げ始めていた調査研究を無事終えることができました。図書館の文献検索が自宅から可能となった事も、大変助かりました。第一子出産の際に経験した研究中断を第二子においても予想し、目指している学位取得の予定も遅延を覚悟していましたが、おかげさまで研究が継続でき、学位取得申請の目的がたちました」

N・N氏(理学部 物質生物科学科 准教授)
 子どもの年齢・九歳
 研究内容・高等植物における細胞小器官の分化に関する超微構造学的研究

「最大の成果は、実験の継続性です。研究助手に仕事を引き継ぐことができるため、安心して実験が始まります。テレビ会議システムで自宅からも指示出しやデータ・画像のやり取りが即座にできます。これにより、研究助手・院生・卒研生たちにも安心感が広がり、研究室の運営も安定しました。子どもが病気のときも、予定していたゼミを中止する

ことなく行うことができ、不測の事態にも対処できるという安心感は大きいです」

(2) 部分継続型キャリアパスモデル
 中断したって大丈夫、復帰するために支援する。夫の転勤や出産を機に退職し、研究を中断してしまった人は多い。中断するというのも女性の生き方の一つの選択肢であると考えられるが、本プロジェクトでは、退職等により研究を中断してしまった人に対しても、研究現場に復帰することができるように支援を行っている。

Y・S氏(理学部 物科学科 学術研究員)
 子どもの年齢・二歳
 研究内容・回折型光機能デバイスの最適設計と評価

「夫の転勤に伴い退職し、しばらく仕事をしていない状態でしたが、本支援により研究を再開することができました。自宅が遠方のため、研究助手との打ち合わせやゼミ参加、また大学院の授業など、テレビ会議システムは大いに利用しています。電話やメールと違い、テレビ会議で実際に顔を合わせて話すことは、在宅で研究を進める上では重要なことであると再認識しています」

(3) 柔軟なキャリアパスモデル
 違うキャリアだからこそできる研究がある。専任職についていなくても、いろいろな形で研究を続けることはできる。違う分野で活躍した人が、そのキャリアを生かして研究現

場に戻ってくることもあるであろう。研究者としての能力は、どのような過程で獲得されたかの途中の道筋には関係がない。そのような柔軟なキャリアを持つ方への支援を行っている。

H・F氏（理学部 物質生物科学科 学術研究員）

子どもの年齢・一歳

研究内容・鳥類の音声記憶についての神経行動学的研究

「非常勤講師などを兼務し、また種々の社会活動（男女共同参画など）に携わりながらも、一貫して鳥類の音声記憶についての研究を続けてきました。本支援を受けることにより、実験・データ解析を研究助手が担当してくれたので、私は研究成果の公表に集中することができました。特に、私たちの研究が朝日新聞に取り上げられたことは、大変ありがたい貴重な体験になりました」

(4) 多様なキャリアパスモデル―研究者としてのキャリアを生かして多様な職種へ―

「研究者」というと大学・研究所・企業などで研究する者というイメージがあるが、社会には科学的な専門知識や実践能力を必要とする職種は意外に多いのではないだろうか。研究というキャリアを生かし、様々な分野で活躍する人を育て支援を行っている。

K・F氏（本学附属高等学校 物理教諭）
子どもの年齢・一歳、五歳

研究内容・カスタムアレンジ型eラーニングシステムを用いた高大連携の物理教育

「自分自身の研究経験を生かして高校生の教育に携わりたいと希望し、物理教諭となりました。育児と教員の仕事に忙しく、研究を継続することは難しいと半ばあきらめていたのですが、本支援により続けることが可能になりました。教育現場だからこそこそでの研究があり、また研究を続けているからこそできる教育があると思います、日々動んでいます」

〔NPO法人との連携による全国初の病児保育制度の開始〕

本学には、さくらナースリーによる常設保育・一時保育、生涯学習総合センターによるロイヤルベビーサロン委託の一時保育（イベント保育）など、充実した様々な保育環境が既に整備されている。しかし、円滑な研究活動を進めるためには、子どもの病気などの緊急時への対応が望まれていた。そこで、NPO法人とパートナーシップ法人契約を締結することにより、平成十九年十月より非施設型の病児保育制度を開始した。Uーリサーチャーのために優先枠が確保されており、緊急時でも一〇〇%自宅に保育士が駆けつけるといふものである。これまで施設型の病児保育を取り入れた大学はあったが、NPO法人と連携し非施設型病児保育を取り入れた大学は全国初である。

【まとめ】

ユビキタスリサーチ支援部門は、本プロジェクトの目的である「出産・育児と研究活動

の支援」と「活躍の場の拡大」の中核の活動を推進してきている。初年度はテレビ会議システムの導入に関して工事の手続き、機器の受取や設置など、どのように進んでいくのかのイメージがわかず戸惑うことがあった。さらに、マンションへの新たな光ケーブル施設の不許可（マンション管理上の問題）、施設後の不具合などの予期しない問題も生じた。しかし、こうしたプロジェクト初期の障害を考慮しても、テレビ会議システム設置後は、具体的な研究活動を進める上での成果やUーリサーチャーと研究助手との連携、Uーリサーチャーの交流など、予想を越えた順調な運用と効果をあげている。その結果、文部科学省、財務省などの査察の対象に選ばれるなど、高い関心を持っていただいている。従って、本プロジェクト終了後も個人加入のケープルを利用して、支援を継続できるようにすることが望ましいと感じており、今後も検討および試行錯誤を加えていきたいと考えている。

参考文献

- (1) 文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業
日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」平成19年度成果報告書
文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業
- (2) 日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」Newspaper第3号
- (3) 日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」Newspaper第3号
- (4) 日本女子大学「女性研究者マルチキャリアパス支援プロジェクト」平成19年度成果報告書
- (5) 文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業
- (6) 電子情報通信学会誌 vol.90 No.6, 20007
学術月報 vol.60 No.5, 20007